

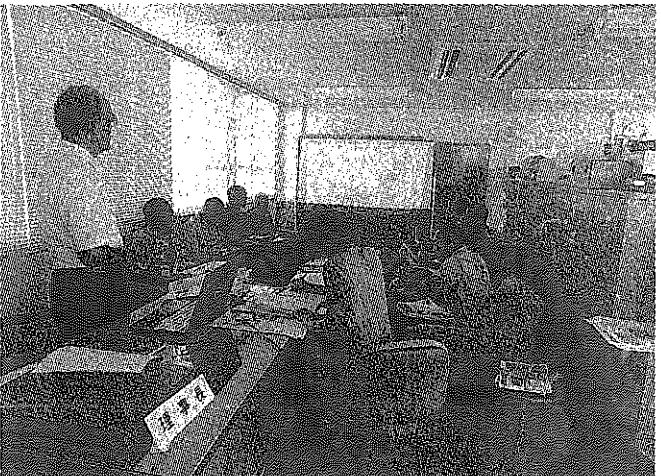
# JICA「持続可能小規模漁業」コース—— 途上国の研修員が学ぶ

## 神奈川県栽培漁業協会で

【三崎】国際協力機構（横濱国際センター）（JICA横濱）で「食料安全保障と貧困撲滅のための持続可能な小規模漁業コース」で学ぶ開発途上国の研修員8人が6日、三浦市三崎町城ヶ島の神奈川県栽培漁業協会を訪れ、県内の栽培漁業などについて今井利為専務の説明を聞き、質疑応答した。

一行は、コモロ、ギニア、セネガル、トーゴ、モーリタニアの各国から来日して同コース（フランス語B）で学んでいる研修員とコーディネーター兼通訳ら計11人。今井専務は県の漁業、漁獲・水揚げされる魚種などについて解説した。

さらに「当協会ではマダイ、アワビ、ヒラメなどの種の生産、確保、



今井専務の説明を受ける研修員

放流などに取り組んでいる」と事業内容を紹介。マダイについてはふ化から陸上、海上飼育を経て、「近年は60万尾の種苗放流を続け、放流効果まで調べている」と紹介した。

研修員から「栽培漁業に漁業者がどのように関わっているか」「生産した種苗で養殖まで行っているか」などと質問が相次いだ。今井専務は「種苗生産、中間育成し、漁業者の放流に立ち会う。協会での養殖は行っていない」などと説明した。

研修員は8月19日以来、これまで日本の水産行政と漁協、共同漁業権と漁業管理制度、漁獲物処理と加工技術などの講義を受けたほか、横浜市中央卸売市場やJF横浜、市漁協、JF東安房漁協などを視察。それぞれが取り組んでいる事業を学んだあとに、三崎魚市場を見学し、同協会を訪問した。

今後研修員は、埼玉県水産研究所、富山・JFくろべ漁協、水見市の水産加工施設、魚市場見学、定置網漁業なども見学したあと、各自がアクションプランを作成、発表して10月2日に帰国する。研修成果を各国の漁業現場での有効的かつ実務的な応用に生かす。